

第3回 滋賀県観光事業審議会 議事概要

1 日 時：平成29年12月26日(火) 10:00~12:00

2 場 所：大津合同庁舎7階 7-A会議室

3 出席者：(敬称略 50音順)

○委員：石川 亮、 石崎 祥之、 伊吹 惠鐘、 岩田 春美、 王 小娟
金子 博美、 川戸 良幸、 佐藤 郁子、 菅又 武之、 田中 治男、
殿村 美樹、 羽田 真樹子、 吉井 茂人、 吉田 満梨

○オブザーバー：廣岡 秀一、 廣脇 正機

<開 会>

江島商工観光労働部長あいさつ

- 「滋賀県観光事業審議会」の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。
- 本日は、年末の大変お忙しい中、会議にご出席いただきお礼申し上げます。
- さて、観光産業は様々な分野の業種と深く関連する裾野の広い産業であり、その振興をはかることは、地域経済への波及効果や雇用の創出という意味でも大きな役割を果たしている。さらに、私たち、地域に暮らす者にとっても、その魅力に改めて気づき、地域に対する誇りを持つきっかけにもなるなど、その効果は非常に大きいものがある。
- 十分ご承知いただいているとおり、滋賀県は日本一の琵琶湖を中心に、豊かな「自然環境」に恵まれている。琵琶湖周辺に広がる開放的な水辺の空間は何物にも代えられないもので、サイクリングやウォーキング、トレイルやクルージングなどを通じて、雄大な自然を体感出来る場であるとともに、そこにいるだけで心が和む癒しの空間でもある。
- また、水との交わりの中で培われ、今も息づく「生活文化」、古くから交通の要衝として栄え、幾度となく歴史の舞台となった「歴史文化遺産」など、観光資源となる地域の魅力が、県内の至る所にある。
- さらに、交通利便性が極めて高く、関西、中部・北陸等から短時間でアクセス出来る地理的優位性がある。
- 県としては、こうした滋賀の強みを活かし、豊富な観光資源の魅力に磨きをかけ、県民が誇れる観光振興をはかるため、平成26年1月に「滋賀県『観光交流』振興指針 訪れてよし、迎えてよし、地域よしの『観光・三方よし』」を策定し、これまで3年半にわたり、滋賀ならではの観光資源を国内外に発信してきた。
- 昨年は延べ観光入込客数が約5,077万人、観光消費額が約1,735億円となり、指針の目標である延べ観光入込客数4,800万人、観光消費額1,640億円を上回

り、指針に基づく取り組みに一定の成果があったものと考えている。

- 一方で延べ宿泊客数はやや減少しており、今年もその傾向は続いている。あるいは、認知度という面でもまだまだ低いところにあり、その向上などの課題は残されているところである。
- そこで、来年度に現行の計画期間の満了を迎えるにあたり、これまでの環境の変化や観光振興の取組の分析等を行い、滋賀らしい観光振興にむけ、現行の指針を改定したいと考えている。
- その中で、滋賀を訪れてくださる観光客の皆さんだけでなく、受け入れ側の県民も共に喜び合える、そういった環境づくりを、観光事業者の皆さん、県民、行政が一体となって目指してまいりたいと考えている。
- 指針がこのような観光振興を行うにあたっての具体的な方向性を示したものとなるよう、皆様のお知恵と経験をお借りしながら改定してまいりたいと考えているので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

議題1 滋賀県の観光を取り巻く状況等について

事務局より資料1～6および資料8について説明があった。

委員意見、質疑

(会長)

- 今、説明いただいた資料について、この点がよくわからなかったというところがあれば、ご質問いただきたい。
- また、国の観光施策から県の方針までの資料があるが、重点で議論をしていかないといけないのは、資料4と資料5である。この資料4と資料5が目新しいというか、まだ議論をしていない所なので、特に資料4は一応キーワードは県のほうで挙げているが、皆さんの立場からして、これはもう少し突っ込みが足りないのではないかとか、あるいはこれをどう展開するんだとか、ご意見があらうかと思うので、このあたりを中心にご意見をいただければと思う。
- 併せて、観光に限らず、全体の政策ということで、SDGsという新たな概念が出てきているので、これと照らして観光はどうなんだというところもぜひ、ご意見としていただければというふうに思っている。
- さらにということで、ここにとらわれずに、今の全体のところで前回こういう発言したけれども、例えばそれどうなってますかというようなところも含めて、これだけは言っておきたいということがあればご発言をお願いしたい。

○個人的には、新聞紙上とかを見ると、インバウンドが増えて宿泊施設が足りないという話も出ているが、大阪の宿泊施設が9割ぐらいの稼働率だという中で、なぜ滋賀県の宿泊が1割も落ちてしまったのかというところは、ご説明の中で、京都、大阪の宿泊施設の逼迫が少し落ちついてきたので、今までどうしてもそこに泊まれなかった人が滋賀に来ていた部分がなくなってしまったというようなお話もあったが、本当にそうかというところもあるので、これは例題ですが、もし何かあれば。

(委員)

○資料1の39ページのグラフは訪日外国人延べ宿泊者数の国籍別だが、平成28年に特に大きな伸びを示しているというベトナム、韓国、ドイツ、オーストラリア、シンガポール、これは、団体客も入っている数字ではないかなと思う。というのは窓口では、これらの地域の人からの問い合わせはあまりないので、恐らく団体客の数字も入っているのではないかということからお聞きしたい。

(会長)

○戦略を考えていく場合は、言われている点は非常に重要で、やはり個人客と団体客では行動パターンが全然違うので、数の上でということと、実際に滋賀県が狙うところはどちらかという、ひょっとしたら個人客になるかもしれない。そうすると数ではそれほど出ないけれど、そういうところをどう掘り起こしていくかということが重要であるとか、そのような話になるかもしれない。

(事務局)

○この統計では切り分けて集計がされていないので、恐らく団体客も入っていると思うのと、もう一つは今挙げた国は母数が少ないので、例えば少し大きな団体が一つ入っただけでもぐっと率は上がるという実情はあると思う。ただ、このエリアの方が一定の割合で滋賀に興味を新たに持っていただいたということではあると思うので、そのことは大事にしたいとは思っている。

(委員)

○観光客は増えているということで先ほど部長からもお話があったし、新聞にも出ているし、資料にも出ている。宿泊が減っているという部分だが、これを考えると、やはり、私が見るところ、外国人の観光客はそんなに滋賀県で減っていないような気はする。ただ、国内の観光客が観光するスポットとして滋賀県がまだまだ選ばれてない。これを

見ても、やはり大阪、兵庫、せいぜい愛知、その近辺の人が何かイベントがあれば滋賀県に行こうか、という程度の観光である。だから、1泊しない。

○本当にもっと興味のあるスポットがあって、もっとしばらく滞在していたいというものがあれば1泊すると思う。ところがそれがない。滋賀県の観光というのは常に一過性のもの。例えば彦根が410年祭をやっているけど、直虎も終わってしまっていて、今まで来ていた静岡のお客さんがパタッと来なくなっている。前は直虎があったので彦根にも寄られたが、それが終わったらピタッと止まっている。それが一過性の滋賀県の観光ではないかと思う。

○やはり大事なことは、今、東京で「ここ滋賀」ができたが、東京だけではなくて、人が観光に集まる場所に滋賀県をPRする何かを考えた上で、例えば東京もそうだが、大阪、京都、もっと言えば福岡、あるいは仙台でもいいし、北海道でもいいと思うが、そういう人が集まるスポットに滋賀県をPRする何かを、例えばポスターでもいいし、そういったものをやはり媒体として置いて滋賀県をPRすることで、遠方のお客さんに来てもらう。何かの時に滋賀県って書いてあったなあ、そういえば古い都、近江、信楽なんか聞いたことがあるぞ、どんなとこかなあ、とネットで調べていっぺん行ってみようかなあ、京都に行くついでに滋賀県に行ってみようかなあということにもなるので、もう少し認知度をあげるためには、人が集まる場所に何かそういう仕掛けをしたほうがいいのではないかな。遠方のお客さんは当然日帰りでは無理である。

○例えば北海道から来られたら最低でも関西に2泊3日はするので、じゃあ京都と滋賀に泊まろうとか、あるいは滋賀と奈良に泊まろうとか、こういうようなことができると思うので、やはりいかに国内の遠方のお客さんを滋賀に呼び込むかである。

○京都はブランドとして来ているから、誰もが修学旅行で一回は行ったので、もういっぺん行きたいなということに来るんだろうが、滋賀は京都や大阪に比べると、どこにあるの？びわ湖って滋賀県？比叡山って京都じゃないの？みたいな感じだと思う。やはり比叡山は滋賀県だよとか、琵琶湖は滋賀県だよとか、もっともっと、せっかくいいものがたくさんあるので、そこを思い切り全国に発信しなければいけないのではないかな。それによって、遠方からお客さんが来ることで観光も当然増えるし、宿泊も増えるということになるのではないかなと思う。

(委員)

○資料1の7ページの「国内観光の形態の推移」について単位が%だが、団体旅行は1と数えるのか、50人の団体だったら50と数えるのか。個人旅行の1と団体旅行の1はだいぶ違うので。⇒人数でのカウント。

- 先ほどから宿泊の話も出ており、肌で感じているうちの旅館の話でいうと、他の滋賀県の旅館・ホテルとは違うかもしれないが、イメージとしては京都、大阪からあふれて滋賀県に流れ込んでいるというのは昔から同じ。
- 特に最近さらに顕著にあらわれているのが、京都が外国人の宿泊者であふれたので日本人が滋賀県に泊まっている。だから結果として、日本人の国内の旅行のお客様が滋賀県に行きたいと思ってなくても来ていただいて、滋賀県に来ていただいてから、いい所だと思ってもらって、その方たちはかなりの確率リピーターになってくださっている。
- 海外のお客様に関しては、恐らく最初から旅館を選んでおられないので、海外のお客様の滋賀県の旅館の宿泊人数の推移というのはホテルの状態がどうなっているかということだと思う。それでもたまには旅館にも海外のお客様がわざわざ旅館体験ということで選んでくださる場合もあるが、それはそれで温泉があったりということで、初めから滋賀県の観光と温泉というのを目的として来ていただいている感じである。

(委員)

- 資料1の48ページに現状評価があるが、関東といった遠方から来られている方の満足度が比較的高くて、近隣の滋賀、大阪、京都が低い。どちらでもないという回答が近隣は高いという感じがするが、この辺の要因についてはどう分析しているのか。思いがけなく来てしまって満足度が高まっている方なのか、あるいは特定の目的を持って来られている方なのかというのはどうか。

(事務局)

- これ以上の情報がないデータなので、あまり細かい分析はできないが、観光目的で来訪されて、遠くから図らずも訪れた場合に、期待値が余り高くない状態で経験をいただくということと、逆に京都などの近隣の皆さんは相応の情報をもってお越しになった中で、期待どおりだった、思った以上ということはなかったというようなことになるのではないかと、というのが逆に私どもが観光に出かける時のことを裏返して考えると、そういうことがあるのではないかと思う。

(委員)

- 資料3にある地域ブランド調査で、認知度や観光意欲度を指標として測っておられるが、地域ブランド調査というのは何がもとになって、認知度や観光意欲度を測っておられるのかというのが一つ。
- それから認知度は、3年、4年かけてちょっとだけ上がったということに対する評価は

県でされているかどうかの2点をお願いしたい。

(事務局)

○基本的には、これはアンケート調査で分析がされている。例えば、観光意欲度だと、その地域へ行ってみたいですかという質問に対し、4つの選択肢があり、「ぜひ行ってみたい」、「機会があったら行ってみたい」、「どちらとも言えない」、「あまり行きたいと思わない」ということで、これをポイント化がされて、加重平均、重みづけをして集計されるということで、合計のスコアを高い方から低い方に並べている。それは認知度も同じようなことで、認知度の場合は、「よく知っている」、「知っている」、「少しだけ知っている」、「名前だけは知っている」、「名前も知らない」ということで、本県の場合はその「名前も知らない」というのはさすがにほとんどないが、「名前だけは知っている」というのが非常に多くて、そこがどうかということであると思う。順位については相対的なものなので、しかもこのへんの中位くらいのところはドングリの背比べをしているので、ちょっとしたことで変わっていくのかなと思う。

○本当はあまりこの結果に一喜一憂してはいけないということであると思っているが、一方で、世間的にもこれが非常に喧伝されるところがあるので、喧伝されるということはそれをどう使っていくかっていうことを考えていきたいという意味で指標に挙げたということである。

(委員)

○地域ブランド調査の近畿府県の状況はどうか。

(事務局)

○魅力度で見ると、京都が2位、奈良が6位、大阪が7位、兵庫が12位、ここが上位グループ。そして滋賀が28位、和歌山31位ということで、大体どの指標もこの4つと2つに分かれているのが多いように思う。認知度は、京都が3位、大阪が5位、奈良が6位、兵庫が10位、これが上位4つ。滋賀が26位、和歌山36位ということで、大体この2つのグループになる。観光意欲度も同じように、京都2位、奈良4位、大阪10位、兵庫16位、そして和歌山が34位で、滋賀が38位ということで、この4つと2つという構図が全体を通じて言えるということである。

(会長)

○先ほど委員から、例えば彦根城のようなものもイベントに頼るのではなく、遠方でもっ

と積極的なプロモーションをしてはどうかというようなところで、まさにこの資料4についてご意見もいただいたかと思うので、県が出されている方向性について、皆さんのほうから、こういうふうにしたらもっといいんじゃないかというようなご意見なんかもこれから頂戴してまいりたいと思う。

○併せて、観光だけではなくて、住民の生活という点で、資料5にあるSDGsという考えが打ち出されてきているので、これとの関係で、先ほどの民泊問題もそうかと思うが、観光客を受け入れると同時に、そこに住まれてる方との、安心安全な生活とのバランスをどうとるかということも、観光の大きな課題かと思うので、この辺についての忌憚のないご意見をいただければと思う。

(委員)

○方向性についてすごくよく考えていらっしゃると思う。ただ、私はPRが専門なので、このままでは社会に認知されないと思う。最近、観光に限らず、認知の仕方が変わってきている。インターネットの影響で全てビジュアルがなければ認知されなくなっている。いくらビワイチがいいですよと説明をしてもダメで、インスタ映えに象徴されるように、これはすばらしい、きれいだと思うビジュアルが最初にないと認知されない思考回路になっている。滋賀県には風景、自然を求めているというデータも出ているのに、現状では自然で思い出すビジュアルといえば琵琶湖の一風景ぐらいしかない。琵琶湖に観光客を呼ぶなら、もっと多様に美しい写真を集めて見せなければならないと思う。さらに新琵琶湖八景でも構わないし、まとめて見せる工夫をすべきだ。最近、鳥取県議会で星空保全条例が採択されたが、とてもうまい方法だと思う。ビジュアルから観光客を誘致する方法として、ひとつの参考にされたらどうか。

○「知られない」は「存在しない」と同じこと。とにかく、滋賀県の印象的なビジュアルをしっかりと見せていく仕組みが必要だ。総務省の情報通信白書によると、ネットとテレビしか見ない人が大半を占めている。そんな時代だからこそ、認知させる方法を考えることは方向性に入れるべきだと思う。

(会長)

○プロモーションのプロからの貴重なご意見だと思う。

(委員)

○私は観光事業者だが、今いろいろお話を聞いている中で思うのが、今、観光がすごく変わりつつあるということ。今回、諮問いただいたが、平成31年度からの計画ということ

で、この平成 31 年度自体がない時代になる。そういう意味でも時代が大きく変わっている。そういう中で今、観光の将来を考えるのに、実際に観光を楽しんでいるのが 50 歳代以上が多いからそこに向けたらいいという問題ではなくて、やはり観光の主流というのは 1 番その時代を担っている世代であるという考え方をすると、観光施策の大きな方針というものは、今よくミレニアルズと言われる 2000 年以降に成人している、2020 年から 2025 年ぐらいに 1 番働き盛りになっている生産年齢人口のピークの世代に向けるべきかもしれないし、そういう意味でも、どういう方をターゲットにもっていくか。

○それから、どこまでの期間、SDGs と同じ 2030 年というところまでを目標にするならば、その間をどういう期間を区切って、この指針の諮問をしていくのかという、期間的な問題がある。民間でも 3 年ごとの計画と、今だと 2030 年もしくは 2025 年とか、ある程度 3 年の倍数か 4 年の倍数ぐらいで期間を区切って、全体のビジョンと一定期間のビジョンと、なおかつ 1 年ごとのビジョンとするなど、組み立て方も大分変わっている。

○それともう一つ、やはり昔の観光は旅行者だけが楽しんだらいいということで、旅行者が何か感動をしたり、味わったりすること自体が観光だったが、今は、「訪れてよし、迎えてよし、地域よし」ということで、旅行者もそこに住んでいる人も同じように共感したり、何か共鳴するようなことが観光であるという価値観が変わっていると感じる。そのようなことを共通に認識し、ここにいる委員の皆さんの価値感というものをある程度共有して、その上でどういう意見があるか、どういう方針があるか意見交換しないと、なかなかまとまらないのではないかと思う。

(会長)

○非常に大きな時間軸の進め方、あるいは全体の方向性というか、ベクトルの合わせ方みたいな、非常に大きい、重い課題をいただいた。

(事務局)

○内容はまたご議論いただくとして、時間的な期間の問題について、前提になりそうなのでお話をさせていただく。現行の指針は 5 力年の期間をもって策定をした。これを例えば 10 年、20 年というように長い期間を見通すということも恐らく大切ではあると思うが、この分野に関しては状況の変化が非常に早いので、あまり今から 20 年後のことを見通しても、逆に今から 20 年前に今の状況が想定できたかと思うと全くそういうことはないと思うので、長くすることは考えないようにしようとするところは考えている。5 年にするのか、あるいは 4 年というのが私ども行政の世界では、一つの区切り、これは、知事の任期によるというようなことがベースにあるが、特に観光分野については、やはり一番時代の中で

動いているということ、それともう一つは、選挙ということで地域の住民の皆さんの意思表示がされる際に大きく動きやすい一項目であるというように考えると、ある程度そこに合わせていくというのも一つの方法かな、というように考えており、そのあたりは、次回3月に骨子をご提案する際に、具体にはお示しをできればと思う。

(会長)

○今回は第3回の審議会で、今まではフリーで意見をいただいていたが、そろそろ今ご指摘があったように方向性を決めて、できれば一点に集中するような、より詰めた議論をしていきたいということで、委員の任期の問題もあるので、今日は私から提案させていただいた二つの問題についてメインでご意見をいただいた上で、さらに、ご指摘をいろいろいただいておりますけど、先ほどの委員からの技術的な問題というか、トレンドに合わせてという提案を組み込んで、これをどういうふうに答申に反映されるかというのは、事務局にとってはものすごく大きな課題であろうかと思うが、この審議会では限られた時間の中でどんどん皆さんのそれぞれの立場からご意見をいただいて、できればそういう、方向の定まった、それも時間軸をちゃんと意識したものを最終的にはつくっていききたいというように思っているので、引き続きご意見をいただきたいと思う。

(委員)

- 皆さんのお手元に冊子があるが、この「日本遺産 滋賀・びわ湖 水の文化ぐるっと博」は10月から始まり、ちょうど3カ月が過ぎた。
- このぐるっと博の一環で、参考資料2の7ページに記載されている公開活用整備事業として、日本遺産案内板や構成文化財の誘導を図るための案内板が、東近江市では10基、五個荘金堂では6基整備されたが、この案内板は目につきやすく写真も美しく大変よかった。特に五個荘博物館の案内版は一回り大きく、特に見映えがしていた。他にも、今、JRの琵琶湖線能登川駅にも日本遺産関連のポスターが張られ、宣伝効果は大きいと思う。
- 8ページのおもてなしの環境整備事業だが、観光地のトイレ整備について、ここにも載っているように、大津市、長浜市、近江八幡市、湖南市を対象に工事が行われたが、念願であった東近江市永源寺のトイレも美しく整備され、女性用トイレは5つあり充実しており、手洗いはお湯も出て来訪者には大変好評である。
- ぐるっと博が始まってからの集客数だが、永源寺は大幅な増加となり、特に、ライトアップが旅行会社のツアーに組み込まれて、観光バスの乗り入れが昨年と比べると大幅に上回っている。日本遺産の宣伝効果が大きく影響している結果だと思う。ぐるっと博は今ちょうど中間の3カ月になるが、五個荘の場合は秋の集客数は昨年と比較するとやや減少ぎ

みだが、ひな人形めぐりのイベントが2月、3月に控えているので、集客数が伸びることを期待している。

○それと、琵琶湖一周健康ウォーキングに関しては、2011年からは県の交通戦略課と滋賀県ウォーキング協会とで継続して実施している。今年度、4月の第1回目には約480名の参加者あり、毎月平均250名の方々が、琵琶湖周辺のウォーキングを楽しんでおられる。滋賀の男性の長寿全国1位の所以もこのあたりにあるのではないかと。副知事にも昨年と同様今年も参加していただき、今津から長浜までの21キロを完歩され、一緒に歩かせていただいた。また、びわ湖パノラマウォークも回を重ねるごとに充実し、全国のウォーカーに、滋賀の魅力を満喫していただいているところ。

(委員)

○今回の資料で、宿泊利用されている方が50代から60代が中心であるというデータがあった。今後の観光振興指針の中でターゲットを決め打ちにすることは是非があると思うが、どこに対して中心的に訴求していく考えであるかということである。

○今後、その中高年、これまでの主要なターゲットではあったが、その後を考えたときにはやはり、30代、40代からの認知が、滋賀県が想起もされないということになることが1番危惧されるところで、50代になってのんびりしたかったら、水のある風景の滋賀県、仏教美術、文化財のたくさんある滋賀県に行きたいよね、というようなものとして認知されているということも必要になるかと思う。

○もう一つ、滋賀県の特長として、30代、40代の若いファミリー層の方々が湖東周辺などにたくさん住んでおられて、県民の方が、県内で県の反対側に行ってみようとか、日帰りであろうとも、県内を観光する機会というものは、ほかの府県に比べて多いのではないかなというように思う。

○だから、先ほどの意見にもあったが、若い方々に対して、滋賀県といえばこれだと思ような美しい映像を多数出していくということも必要ではないかなというふうに思う。

(委員)

○資料4の「これからの滋賀県の観光施策の方向性」はいつも同じような形で出てくるが、滋賀の強みっていうのも、いつも同じ項目があがっている。その背景には詳しいものがあるだろうが、これを他府県の人とかに出したときに、そんなインパクトがない。だから、その辺のキャッチフレーズというか打ち出し方をきちんと、もうちょっと考えないといけない。例えば私は長浜だが、歴史で戦国の姉川古戦場等と入っていても何とも思わない。だから滋賀県全体の戦国も含めた歴史、そういうものをきちんと検証しながら、滋賀の強

みというのはこれだけ見ても余りおもしろくないので、もう少し考えて出す必要があるのではないかなと思う。

○いつも思うが、方向性が出て、施策が出て、たぶん関係部署がそれぞれ縦割りで予算を付けている。だから、滋賀県でこれからもっともっと観光を充実しようとしたら、集中的に横の連携の中で予算付けをきちっとやって、その成果はこうだったということも審議されて、それぞれ予算付けしていかないといけない。

○そして、これから、長浜も外国人の観光客は昨年度は減少しているが、日本人の方が増えている。ただ、オリンピック・パラリンピックで京都、大阪、名古屋などでどんどん宿泊施設ができていく。そういったものができてきたら、たぶん長浜なんかはますます観光客が減少していくだろうという思いを持っている。だからあまり期待はしないで、どうしたらもう少し、一つの大きなイベントやスポーツではなく、コンスタントに上げていく方策っていうのをやっぱり考えておかないとだめなんじゃないかという思いをしている。

○それと来街者調査を 400、ウェブ調査を 150 としたが、来街者調査の回答、ウェブ調査の回答に大きな違いが一つあった。来街者調査では黒壁スクエアが 1 番だった。一方、ウェブ調査は豊公園を中心とする琵琶湖が人気だが、じゃあ、その琵琶湖に行ってみたら流木があっけきれいにされてない、そういった配慮がされてない、ということもあると思う。だから、琵琶湖や豊公園といった自然に物すごく関心をお持ちになっている人が多いのに、意外とそういったところに対する支援の予算づけもされてない。そういった観点というのも何か考えていかないと。

(委員)

○滋賀県で満足されているのが自然であるというように感じたが、私どもは山の中で飲食店をやっているが、大阪や名古屋などの都会から来られる方がすごく多い。受け入れ側としては田舎であるということに卑屈にならず、やはり都会の方が求める田舎を提供し、こちらの田舎を押し付けないようにしている。それでこちらが提供したサービスの対価をいただくフェアツーリズムという考えでやっているが、お互いが無理しない自然な関係が続くからこそ、持続可能な形でできているのだと思う。

(委員)

○これまでのデータを見せていただき、併せて資料 2 の「観光交流振興指針の概要」なり、これからの観光施策の方向性というところで、基本方針が、「観光交流を通じて活力ある地域社会の実現を目指す」という、まさに本質をついた方針かなというように思う。観光というものを見世物にしようとするのか、そうではなくて、そこには必ず交流があるとい

うことで、「観光」の次に「交流」が付いているところが1番大切なのではないかと思う。虚飾というのか、見世物の観光地にしようとするのか、見ていただく観光地にしていくのか。見世物にしようすると、とてもじゃないが大阪、京都に勝てない。むしろ見ていただくという、それが、サステナブル、持続可能というものであると思う。それが最終的に「三方よし」というところに繋がっていく、そういうところを意識して「交流」という言葉を入れられているのだと思う。

- そういうところからすると、先ほどちらと出たが、健康。滋賀県の男性の健康寿命が日本一、これは偶然ではないと思う。この中に書かれてある、自然、歴史、文化、食、こうしたものの総体というか、滋賀県民の暮らしなり、環境、そうしたものがそうさせているのだろうと。
- 必ずこれからの時代というのは、健康っていうのが、よく言われる何十兆円産業ですから、もうこぞっても健康、健康になる。この健康という一つのキーワードも、大きく観光というものと結びついてくるかなという気がする。恐らく日本全国びっくりしたと思うが、これをもう少し我々県民そのものが自覚しながら、そして滋賀県にあるもの、文化、環境、健康そうしたものに触れていただくという、こうしたものが大きな王道になっていくのかなという気がする。
- いくら逆立ちしても京都、大阪、東京には勝てないといったときに、それが滋賀県ならではという、それは両刃になるかもしれないが、滋賀県が余り認知されてないという、これは考えようによっては滋賀県の魅力なのかもしれない。最終的に、ここに書いてある、「活力ある地域社会」というものを見た時に、今の「健康」というのが大きな産業、そして観光になるのではないか。

(委員)

- 成安造形大学の学生も、やはりこれからの社会がどのようになって行くのか？ということに一番興味を持っているし、造形や美術デザインという領域に何ができるのかと考えるときに、やはり、自分達の10年後、20年後、持続可能な社会というのを自分たちもどういうふうを考えていくのかということは、これも我々大学では大きな問題である。一方、滋賀県は、真ん中に湖があり、湖があるからこそ、仏教文化であったり、戦国の文化であったり、様々な文化が受け継がれその恩恵に預かり今日、その環境に対する意識などが育まれた。
- 実は東近江市からの依頼で様々な取り組みをされている方々のリサーチをこの夏行った。その中に池田牧場があり学生と行かせていただいた。学生達はオーナーのお話を聞き、こんな牧場があることを知り、物すごくびっくりしていた。子供や孫の時代の環境のあり方

を見据えた考え方の取り組みは実は最近始まったことではなく、石けん運動の頃から、すでに始まっており今日まで受け継がれている。東近江というこの場所では、自分たちが生活、くらし、環境を作っていくのだという意識が育まれてきた。京都、大阪にこの水が流れる。最上流で生活しているという意識を持つこと、日本遺産滋賀・びわ湖のテーマにあるように「琵琶湖とその水辺景観-祈りと暮らしの水遺産」に示されている。常に水に触れ合っただけでくらしが営まれてきたことが、SDGsにしっかりつながっていると感じた。そもそもこのSDGsの考え方が暮らしや生活の中にあるのだということを、学生は理解していくわけである。

○だから、この資料4から資料5につながる話だが、次の4年後、5年後になるかわからないが、そこにどうバトンタッチしていくかっていうときに、滋賀県はSDGsという考え方に今踏み込んでいるわけであるし、そもそも、我々も持っている感覚というか考え方だと思うので、これをやはりこの新たな観光振興指針の中にしっかりと書き込んでいき、意識づけしていくということが大事ではないかと考えている。

(委員)

○資料6の民泊については、今、宿泊事業者の間では注目して今後の行き先を見ているところだが、なかなか一般の方にはなじみのない話のような気がしている。国が新しく住宅宿泊事業法というのを作ったが、それによって注意しなくてはいけないところが、一般の住民の方たちに影響するところもあるので、この宿泊業をやっていない方たちこそ、注目して今後の行き先を見ていただきたいと思うし、実際、違法民泊というのが問題で、違法なだけに目に見えてこない。いくらこの法律をつくって民泊が認知されても、違法民泊というのは実態がわからないので、住民の方たちが実際に、あそこは住宅なのに勝手にいろんな人が来てるよ、みたいなことがあれば直ちに行政にお知らせいただいて調べていただくという、そういう行為がないと違法民泊はなくなるので、そういう窓口をつくってもらうことと、そういうことを一般の人たちに呼びかけるということが大切になってくるかなと思う。

○資料4については、滋賀県で観光業をしている私としては盛りだくさんでうれしい感じだが、実際いろんなところに行ってもらうことを想像するときに、最近、白髭神社でインスタ映えする鳥居を撮るのに私も行って来たら、日本人より海外の人のほうが多かったという状態で、しかし横断歩道のない道を信号のない状態で渡っておられるので、いつか何か起きるんじゃないかという心配と、ピワイチにしてもそうだが、人気先行になっていくところが大変多く、メタセコイヤにしても、事故が起こってからでは遅いので、その辺の整備を直ちにやって、安心安全に滋賀県に来ていただくというのが大前提である。アンテ

ナを張っていただき、その対策っていうのはすぐにとっていかないといけないのではないかなと思う。以前は、今まで知られていない不便なところにどうやって行くかのお知らせをもっと丁寧にしたほうがいいんじゃないかと思っていたが、最近は検索して海外の方が白鬚神社に来るぐらいだが、滋賀県ができることっていうのはやはり地元の整備ということになってくるのかなと思う。

○それで先ほども話が出ているように、ただ見学するという観光ではなくて、活用するというか、歩いてみて、見たり、思いをはせてみたりという、その施設なりがあることがありがたいだけじゃなくて、それをどう活用しようという、それぞれの人生の中にどう取り込んでいこうかっていう、体験がどれだけできるかなっていうことが、今後の対応になってくると思うので、そういう目で資料を見ていくと、一個大きなものがあるというわけではなく、いっぱい宝物のようなものがあるので、それを最近体験型の観光がはやっているが、一個の体験とかいう細かいことよりも、全体にこの滋賀モデルを体験していただくみたいな、滋賀県に来たらこういうことなんですよっていうような、いろんな自然先進国みたいな形で、健康もそうだし、そういう大きな目で見ていくと、今後細かいイベントとかに頼ることなく、持続可能な観光になっていくのかなと思う。びわ湖パノラマウォークが観光庁とスポーツ庁と文化庁が連携してされているスポーツ文化ツーリズムアワードというもので奨励賞をこのたびいただいた。これはパノラマウォークにいただいたが、滋賀県の観光全部に当てはまることだと思うので、いろんなことで、大きな目で見た滋賀県というのをやっていったらいいのではないかなと思う。

(事務局)

○いろいろご意見を応援も含めていただいたというように思う。個々にお答えしないが、一つは、私どもが仕事をする上でどのように考えているかというのをご紹介すると、毎年、予算編成の際はかなりいろんな突っ込んだというか、多少乱暴なことも含めて議論する。特に知事を交えた議論というのは相当深いところをやっているが、最近、カジノを含む統合型リゾート施設、IRを滋賀県としてどう考えるのか、というようなことを議論したことがある。その折に、やはり先ほどから幾人かの委員さんからご意見をいただいているように、滋賀県の特長、この土地の持つ魅力といったものから考えると、IRはちょっと違うでしょう。その中で、石けん運動から長いことかかって、今の環境であったり、あるいは、健康寿命も含めて平均年齢日本一、これは振り返ると、30年弱ぐらいの取り組みがずっとあった中で、それが今こうなっている。そういういろんなことを大事にしながら皆さんが暮らしているこの暮らしぶり、あるいは、その暮らしぶりを支えるこの地域というものを一緒に体験いただく、一緒に参加していただく、というようなものを滋賀県として

は大切にしながら、そこに来てもらうというようなことを考えたらどうか。急には伸びないが、ぐるっと一巡したらトップに立っていたという可能性ある、ということであったり、あるいはそのことが、先ほどイベントなんかで一過性のお客様がポンと増えたり、また減ったりということではなくて、持続的な、あまりデコボコしない、そういうような誘客につながるのではないかとというような、そのような議論をしてきた経過がある。そのことが必ずしも今後も滋賀県の方針だと決めているわけではないが、これまでそのような議論をしながら仕事をしているということをご紹介し、そのことがこれから先を見る上でふさわしいのかどうなのかというのは、これからのこの場でご議論をいただければというふうに思っている。

(事務局)

- いろんなご意見をいただいた。今の話を受けて補足説明になるが、この資料4というのは、知事の前で、平成29年度の予算を作る時に何を中心に考えていくのかというところを議論したときに、水をキーワードにした取り組みをするんだらうという話があり、資料左側の強みを生かして、右側の施策に生かしていこうということで作った。だから、平成29年度の時はこれをベースにしたが、今後、この指針を改定するとき、まさにこの予算をつくる時に何を重点に置いていくのかということを議論いただければ非常にありがたいと思う。
- それから資料2の観光振興指針にあるように、先ほど委員から「観光交流を通じて活力ある地域社会」というところを「健康」というところで捉えたらという提言をいただいた。これも知事の方針並びに予算の方針としてあるが、健康を切り口に全部局で考えていこうということをして来年度に向けて検討を始めている。
- 併せて、SDGsもその中に組み込もうという話なので、まさにこの観光と健康が繋がってくる、SDGsでつながってくるということで、意を強くした。
- それから委員から民泊の話があった。安全安心、やっぱりこれは大切な視点であるので、違法民泊なんかを取り締まる、これは基本的なもの。ビワイチでも危険な箇所は改善していくという話は当然なので、安全安心というところにも力入れていきたいと私は思っているので、今、提言いただいたことを参考にしていきたいと思う。

(会長)

- それではオブザーバーお二人から、今の議論を受けてのコメントを頂戴したい。

(オブザーバー)

○私のほうからは私どもの取り組みについてご紹介させていただきたい。前回の会議でもご紹介させていただいたが、「観光ビジョン推進関西ブロック戦略会議」を先週の12月20日に第2回目を開催した。この会議は、この参考資料5にある「明日の日本を支える観光ビジョン」に掲載施策の各地域の具体的な取り組みの推進を図るために、国土交通省のみならず、関係省庁や、多数の官民の関係者の皆様と連携調整が不可欠ということで、今年の5月10日に立ち上げさせていただいた。この戦略会議の下にある5つのワーキンググループにおいては、観光ビジョンの掲載施策の具体的な取り組みを進めており、その取り組みの成果を取りまとめたところである。

○そして、12月20日の会議では、観光施設の案内板等の整備に係る取り組みの成果や多言語コールセンターの整備、あと文化庁様もご出席いただいております、文化財の観光資源活用に係る取り組みの成果等、代表的なものを報告させていただいた。この取組の成果については、全国の代表的なものを取りまとめて、まだまだ先で大変恐縮だが、来年3月末頃に観光庁のホームページで公開されることになっているので、またご覧いただければと思う。

○そして役職を離れて話をさせていただくと、近畿運輸局には守山に滋賀運輸支局というものがあり、車の登録や検査等を行っているが、私は滋賀の勤務経験が長くて、毎日堅田駅から琵琶湖大橋をバスに乗って渡っていくが、それぞれの季節によって冬は厳しい灰色の琵琶湖であるとか、夕陽が沈んでいくきれいな琵琶湖であるとか、夏はキラキラと輝く琵琶湖であるとか、四季折々きれいだなと思いながら通勤し、休みの日には時間ができたら家族を連れて滋賀にやってくるが、どうしてもたまにしか来ないのでいつも忘れてしまうが、雄琴あたりに行くと急に道路が込み始めて、ちょっと時間がかかり辛いなという思いをすることもあるので、その辺が改善されていくと、また京都のほうからも行かせていただくことも多くなるのかなと思う。

(オブザーバー)

○ビューローは県と協議をし、施策の構築段階から議論をやりながら、予算をいただいて実際仕事をしている、そういう団体であるが、先ほどから出ていた意見の中で、日本遺産の話を委員から紹介いただいたが、先ほど事務局からお話があった「琵琶湖と水に触れ合う旅」の一つが、「琵琶湖とその水辺景観－祈りとくらしの水遺産」であろうと思っている。現在開催中なので、ぜひ皆さんもお出かけいただければと思うが、その中で特に今回は、今までにないものを含め、地域を地元のガイドで歩いていただこう、というプログラムをたくさん盛り込んだ。

○先日、2カ月たったので各市町の方に集まっていただいて、今どんな状況かと聞いたと

ころ、データの的には日本遺産の所在市町の宿泊数が非常に伸びているようなので、それはそれで非常にいいことだが、一つ気づいたのが、幾つもあるツアーの中で、たくさんお客さん集まっているところと、全然集まってないところに大きな差があり、せっかくプログラムをつくったけれど1回もできてないというツアーが実際にある。先ほど委員が言われた発信不足だと痛感をしているが、今まで観光地でないところにそういう形で観光していただいて、じっくり回って、それが10年経ったら、すばらしいところだということになっているようなことを考えている。先ほど「琵琶湖と水に触れ合う旅」を目指しているということをお願いして、そのとおりだと思っているが、やはりまだまだ時間がかかるということをおもっており、事業者の方々や市町と一緒に、もう少し頑張っていけないと思っている。

○それと、このことに関連して、私どもが各地域に出向いて地域懇談会という会員の事業者さんと懇談する機会があり、そこでたまに出る話だが、この「琵琶湖と水に触れ合う旅」となったときに、やはり琵琶湖に面していない市町もあり、そこの方が、常に自分たちは外されているというようなことを言われる。水は上流から下流まで流れているということ考えているし、水にまつわるいろんな文化・風俗や、先ほどのひなまつりも内陸部でされているわけだが、それらも含めていろんな観光のネタがあるので、ぜひそれもやっていきたいということはおもっており、この資料にもそのように書いてあるが、どうしてもそういう印象を持たれてしまうのがもったいないと思う。

特に、高速道路、近江鉄道が通っているところはほとんど内陸なので、そういうところの魅力をもっともっと出していかないといけないということも、「日本遺産水の文化ぐるっと博」をやっていると感じた。今後もその辺に気をつけながら、ご意見も生かして頑張っていきたい。

議題2 今後の進め方について

事務局より資料7について説明があった。

(会長)

○十分意見が言えてないという方がいらっしゃるかと思うので、あと2、3人になるかと思うが、ご意見のある方は全体を通じてできるだけ簡潔にお願いできればと思う。

(委員)

○日本人にさえ知名度が低いという調査結果が出ており、外国人の場合はなおさら。確かに外国人は増えているが、この4月から10月、11月のうちの統計では、滋賀県に対する

問合せは昨年と比べて15%ぐらい増えている。増えているが、期間は結局、夏と冬に集中している。桜シーズン、紅葉シーズンも若干増えているが、一番突出しているのは、夏と冬である。冬はこれから増えてくると考えており、既に問合せが入っているが、スキーに関する問い合わせが特に東南アジアからものすごく増えている。東南アジアは白川郷など雪に対するあこがれがあるので、関西からいきなり名古屋に行って白川郷に行く。なかなか滋賀県を通らない。金沢に行く人は通るかもしれないが、結構素通りしてしまう。雪に対する憧れがすごくあるので、既に12月に入ってから、特にスキー、琵琶湖バレイの問合せがあり、去年あたりからじわじわ増えている。滋賀県は通年版のガイドブックは作っているが、季節観光に関するものがない。春夏秋冬といった季節、外国人など特化しないと、通年のガイドブックはきれいにできているが、これだけでは足りない。やはりターゲットを絞り、外国人の立場に立って、どうやってスキー場に行くか、一泊させて例えば近くの温泉旅館を紹介するなど。だから、春夏秋冬といった季節観光、外国人などターゲットを絞る必要があると思う。

○いくらウェブサイトが発達しても、やはり現場ではこういうパンフレットが大事で、特に京都はすごく先進的で何年も前から情報誌を出しているが、今いろんなところが季刊誌、月刊誌作っている。その時のイベントとか観光の1番流行っているもの、行ってほしい場所とかが掲載されている。滋賀県にはまだ外国語の季節感を感じるものがない。ぜひこの機会を逃さないで、冬はスキー、夏は湖に関するスポーツ、ハイキングもそうですけど、ドイツ人特にハイキングとか、好きなので、あとサイクリングも作ってあるが、これは好評。ぜひ外国語で発信を続けてほしいと思う。

(委員)

○私たちは観光に関係しているメンバーだが、ほかの会議に行くと、滋賀県ってモノづくりの県でしょ、観光なんて京都からあふれてくる人がちょっと来てくれるだけなんで、後回しでいいというような言い方をされる。実際そうなのかもしれないが、観光によって世界中の皆さんから滋賀県が注目されることによって、ほかの産業も絶対に魅力ある滋賀県の産業と手をつなぎたいとか、関わりたいと思ってもらえるはずなので、観光業ということに関しては、今まで以上に、発信なりいろんなことで、力を入れていって、ほかの産業の方にも認めてもらえるような、そういう滋賀県の観光にしていきたいなと思っている。

(会長)

○今日皆さんからいただいた非常に多岐にわたる、しかも深いご意見については、頑張っ
て事務局のほうでまとめていただき、論点を整理して、さらに、先ほどあったようにベク

トルをきっちり整えていくということで、次回の3月の審議会の時にまとめていただき、それに沿って議論をしていくという形にさせていただきたいと思う。

議題3 その他

(事務局)

○今後の日程ですが、アンケート結果等を取りまとめさせていただいた後、次回の審議会については3月に開催を予定している。年度末の非常に忙しい時期だが、ご出席をお願いしたい。また本日限られた時間だったので、十分にご意見を伺えなかったと思っている。また本日発言いただけなかったご意見やご提案があれば、どのような形でも結構なので、メールなどで事務局あてお寄せいただきますよう、よろしくをお願いしたい。

西川観光交流局長あいさつ

○今日は短い時間で、私自身ももっと聞きたかったというのが正直なところ。今日いただいたご意見も参考にさせていただき、また、今後のご意見を頂戴できると大変ありがたい。どのようにまとめることができるか、事務局としては頭の痛いところであるが、何とかしっかり作業してまいりたい。また、併せて、今日この場でいただいた意見については、ちょうど今、来年度の予算編成に向けて作業をし、これから財政部局と折衝していく段階であるので、そういう場でも審議会でご意見があったということも強くご紹介しながら、しっかり予算の確保に努めたいと思っている。

○この先、いろんな作業をした上で、また3月に今度はより具体的なご指摘をいただきながら議論をいただければというふうに思っている。また、改めて日程調整はさせていただくので、よろしくをお願いしたい。本日はどうもありがとうございました。

<閉 会>